

アメリカの対日外交と北太平洋測量艦隊

——ペリー艦隊との関連で——

後藤 敦史

1855年5月、開港地の下田に測量を目的としたアメリカ北太平洋測量艦隊が来航した。この艦隊については、日米和親条約の実効性を確かめるに
来航したという評価が通説である。しかし、実際には同艦隊が派遣された
時点で条約は締結されていない。本稿は、一次史料に基づいて、測量艦隊
の下田来航の経緯とその目的を具体的に解明することを課題としている。
測量艦隊は、イギリスへの対抗と、捕鯨業保護を目的に1852年8月に派遣
が決まった。この派遣目的では、ペリー艦隊と共通している。また、国務
省によって、測量艦隊はペリー艦隊が交渉を持たない国との外交を期待さ
れた。ペリー艦隊と測量艦隊は、ともにアメリカ太平洋進出の両翼を担っ
ていたのである。

一方、ペリーが対日遠征事業の遂行を優先し、東インド艦隊を日本に結
集させた結果、太平天国の乱で混迷する中国の海域からアメリカの艦船が
不在になる事態が生じた。その時に同海域に到着したのが測量艦隊であり、
そのため、同艦隊はアメリカ人の保護のため測量事業を中断せざるを得な
かった。このように、両艦隊は常に連携して行動していたわけではない。

測量艦隊が下田に来航し、日本と交渉することになったのは、鹿児島湾
の測量を実施しようとした際に妨害にあったことから、同艦隊司令長官が
幕府に測量の認可を求める必要を認識するようになったからである。また、
その背景には、琉球においてペリーが締結した琉米協約が反故にされてい
ると認識したということもある。同じように日米和親条約についても、そ
の実効性が不安視されたのである。

本稿を通じて、測量艦隊の日本来航は海軍長官からの指示ではなく、同
艦隊長官の裁量・判断にもとづいていたことが明らかとなった。あたかも
アメリカが対日外交を重視して測量艦隊を派遣したかのような通説は、ア
メリカ外交の中の日本の比重を実態以上に大きく評価するという問題があ
る。従来専らペリー艦隊を通して考察されてきたアメリカの対日外交、ひ
いては太平洋進出の歴史的意義について、再検討が求められるといえよう。